

NEWSLETTER

早稲田大学英語英文学会発行 No. 43・44 合併号 2025.5

「個人」の在り処

安田 利典

東京理科大学教養教育研究院 准教授

そのアパートは増改築を繰り返し、ちぐはぐな見た目でかろうじて全体の整合性を保っている。部屋は全部で7つ。管理人のXは2階奥に位置する少し広めの203に住んでいる。ここでは長年管理人が同居しており、これからも永遠にそうであることが決まっている。正確な理由はXにも分からない。いつ誰が決めたのかも知らない。何しろXは自分の名前すら分かっていないのだ。

Xは1日1人ずつ住人と対話をする。それがXの大切な仕事である。

103のドアをノックする。年の頃10歳くらいの少年が、返答もなくゆっくりとドアを開ける。彼は一日のほとんどをこの部屋で過ごしている。Xに目を合わせることもなく、長めの前髪で表情は読めないが、少年がXを歓迎していることは雰囲気伝わってくる。

Xはいつものように居間の畳に腰を下ろし、CDを入れて曲を再生する。スマホでのサブスクよりこちらの方が好みらしい。少年はCDプレーヤーをじっと見つめながら流れてくる曲を聴き、Xはただ黙って隣に座っている。最後の曲が終わると少年がXを一瞥する。それが「ありがとう」の合図になる。Xは微笑んでわずかに頷き、CDを片付けて、そのまま部屋を出る。

明日は104で経済に関する議論を取り交わし、明後日は201で恋人の愚痴を聞き、その次の日は202で猫の世話をする。それがXにとっての日常であり、同時に全てでもあるのだ。

* * * * *

母語獲得と異なり、外国語習得には個人差の影響が大きい。そのような研究をしていると、ほどなく「個人」とは何かという（なかなか答えにくい）問いにぶつかることになる。

学習者のもともとの性格、学習に対するやる気、それに伴う感情などは個人に内包される心理的要因であり、外国語習得に影響を与える。とても明快な説明だ。多人数からデータを得て、それらの要因を数字や文字で可視化し、一般的な考察につなげる。有意義な研究である。ただ、それだけでは見えない部分もある。だから少数の参加者にじっくり話を聴いて、何らかの答え（あわよくば原理原則）を見出す試みも行われる。これがまた面白い。少人数の話に耳を傾けるだけで、人間に通底する本質が見えることがある（ような気がする）。そうやって人間の複雑さに焦点が当たると、「複雑系」なんて至極シンプルな名前を冠して、ひとつの花形になったりする。現実を正確に反映している分、その複雑さに右往左往してしまう。かと思えば、個人なんて存在しないという斬新なアイデアが出てくる。社会的文脈なるものが人を形成しているのだと教えられたりする。

さて何の話だったか。ああ、「個人」とは何かってことでした。結局のところヨクワカラナイのが実情ではないだろうか。懸命に考えるほどに分からなくなるというのは、世の常なのかもしれない。こういうとき、私が最後に行きつくのは実は「私自身」

(2)

であったりする。世界認識とは自分を通してしか
成立しえないというのは、私のささやかな信念の
1つである。

* * * * *

「個人」はいくつかの部屋に分かれていて、各部
屋には住人がいる。職場では合理主義者の 104、友
人には猫のように気まぐれな 202。彼らは社会的な
要請に応じて出てくることが多い。103 の少年のよ
うにあまりドアを開けたがらない者もいるが、社会
に対して相対的という点で、彼らはおしなべて「社

会的」である。一方で、住人とは一線を画す管理人
X がいる。X は自分の名前が不確かであるほどには
無意識的な存在だが、その役割が管理人であるほど
には「個人的」である。

* * * * *

「外国語学習の個人差に関する研究」なんてして
いると、管理人 X が 103 の少年に日の光を当てよ
うとする行為が学習にどう影響するかを真面目に
考えてみたくなる。それはおかしなことだろうか。
私にはそうは思えない。

ロマン派とその継承

虹林 慶

早稲田大学教育学部 教授

2023 年 4 月に英語英文学科に着任しました虹林
慶（にじばやし けい）と申します。専門は 19 世
紀イギリス文学の詩と散文です。イギリス・ロマン
派の詩の研究から始めて、現在は 19 世紀後半の詩
や散文におけるイギリス・ロマン派の影響について
研究しています。

学部時代に英詩の世界に出会い、次第に関心を持
つようになりました。卒論執筆の際に P.B. シェリー
の“Hymn to Intellectual Beauty”に出会って、理想世
界を描くロマン派の詩に魅了されました。その後、
イギリス留学中にバイロンの風刺詩 *Don Juan* に出
会い、シェリーとは真逆の疑似英雄詩の面白さを知
りました。大学院生時代はこれら 2 人の詩人につ
いて研究を行う中、ロマン派の詩の創造性と多様性
について学びました。特に、イギリス文学史において
ロマン派が与えた影響は決定的であったという強い
感慨を持ちました。

その後、ロマン派の後世への影響に関する研究に
関心を持つようになり、ヴィクトリア朝の詩人と散
文家について、ロマン派の継承という観点から研究
するようになりました。ヴィクトリア朝の詩人につ

いては、テニソン、ブラウニング、D. G. ロセッティ、
スウィンバーンなどを扱いました。これらの詩人は
それぞれ特徴がありますが、特にスウィンバーンの
ロマン派の継承については、実存主義的な思想との
関連で面白い発見があったように思います。ヴィク
トリア朝の散文家については、ラスキン、モリス、
ペイターについて研究を行っています。最初に強い
興味を抱いたのはラスキンです。ロマン派作品をこ
よなく愛したラスキンが“The Nature of Gothic”な
どの散文の中で、ロマン派的感性を自由自在に発揮
している点は芸術批評の創造性を感じさせるものだ
と思います。現在は、ペイターのフィクションを中
心に研究しています。ペイターはラスキンとはかな
り異なる思想の持ち主ですが、双方ともロマン派の
信奉者であることはとても面白いことだと感じてい
ます。

これまで研究拠点が九州であったため、関東に来
ていろいろと戸惑うこともありますが、みなさまに
ご指導ご鞭撻いただきながら、これからも教育、研
究に精進してまいりたいと思います。どうぞよろし
くお願いいたします。

無限の可能性を信じて

川崎 美佐子

早稲田大学教育学部 助手

TO see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower,
Hold Infinity in the palm of your hand
And Eternity in an hour.

これは、William Blake の詩 ‘Auguries of Innocence’ の一節です。Blake は幼子が持つ「無垢」を何よりも尊いものと考えました。無垢とは罪や穢れを知らず、子どものように純粹で善意に満ちた心のことであり、そのような心を持つ人は、有限の中に無限を見いだすことができます。しかし、人は成長とともに「経験」を重ね、無垢の状態を失っていきます。Blake は無垢を「幼子」、経験を「大人」として対立させ、その「相反する人間の魂の状態を超える状態」を追い求めました。それこそが、再び無垢を呼び覚ますことでした。大人になってしまった私たちが無垢の状態に近づくためにはどうすればよいのでしょうか。その手段として「想像力」が重要だと Blake は説いています。

私は 15 年ほど前から、大学の英語の初回授業でこの詩を取り上げています。Blake や詩の読み方を簡単に説明した後、学生たちにグループで日本語訳

を考えさせ、その後、詩の解釈について自由に話し合ってもらいます。そして、最後に詩を通じて感じたことを各自の解釈とともに書いてもらいます。毎回、学生たちからはさまざまな解釈や驚くような意見が生まれ、その想像力の中に無限に広がる世界を垣間見ることができず。また、彼らが他者との交流を通して想像力を膨らませ、人として成長していく様子にも触れるたび、教育の奥深さを感じると同時に、英語を学ぶことが、自己表現や新たな視点を獲得の手段となり、言語の枠を超え、無限の可能性を広げていくことを実感します。こうした学生たちの成長を見守るうちに、その過程を形として残したいと強く思うようになりました。そしてその思いが、私を他者（環境）と学びの関係についての研究へと導いたのでした。

私は、個々の学生たちの中に無限の可能性を見だし、それを引き出せるような教師でありたいと願っています。限られた教室という場の中で、一人ひとりが自分の無限の力を感じられるような授業—そんな場を作り続けていきたいと心から思っています。

変容を受け入れる

工藤 秀平

早稲田大学教育学部 助手

英語英文学科の助手になり最初に驚いたのは、幾分異なる学科の姿であった。我々が教育学部の学び舎である 16 号館こそ姿形は変わらないが、私が学科に在籍していた頃とは、カリキュラムや授業の形態に変化があり、新しい先生方も増えていた。私は助手業務の中でも時間割編成を担当している関係上、学科のカリキュラムや各授業のシラバスを見る毎日であるが、新しいカリキュラムを見ながら、「この授業、今は必修じゃないんだ」「こんな新しい科目が出来たんだ」と思いがけず言葉が出る。一方で、かつて学部の授業でお世話になった先生の名前

を見つけると、先生はお元氣かな、また先生の講義を聞きたいな、と懐かしさと共に嬉しい気持ちで湧いてくる。私は決して目立つ学生ではなかったため、先生方は私を覚えていらっしやらないかもしれないが、あのとき学んだことが確かに研究者としての今の私を形作っており、感謝してもしきれない気持ちでいっぱいである。この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

この先も英語英文学科は時代に適応していき、社会的なニーズに合わせて変化を続けていくのであろう。昔の方がよかった、今の方がよい、そんな思い

(4)

も人それぞれかもしれない。しかし、私が感じたところ、学科を運営する先生方はいつだって“より良い学科にしたい、より良い教育を行いたい”と前を向いておられる。私が目の当たりにしている学科の変化は、そのような志を持つ先生方の努力の結晶な

のだろう。それは必要な変容であることに間違いはないと思う。そのような過渡期にある英語英文学科の運営に、学科助手として少しでもお手伝いをするのが、自身の学科への恩返しであると考えている。

やさしさにつつまれて

和泉 太輔

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

2024年度より、博士後期課程にて原田哲男先生のもとで研究をさせていただいている和泉太輔と申します。私はこれまで、多くの素晴らしい人々との出会いに恵まれた人生を歩んできました。特に、修士課程で原田ゼミの先輩と出会っていなければ、今の自分は存在しなかったかもしれません。先輩は他者への愛情に溢れ、常に温かくサポートしてくださいました。

その先輩にご紹介いただき、原田先生とお会いした際、先生の情熱と英語教育に対する深く鋭い考察に心が揺さぶられたことを今でも鮮明に覚えています。どうしても原田先生のもとで学びたいと強く感じたのが、一昨年夏でした。現在、原田先生の温かく思慮深いご指導のおかげで、人生で最も充実した時間を過ごしています。

日々、自分の知識不足や研究設計の甘さを痛感するものの、ひとつ気づいたことがあります。それは、原田先生と原田ゼミのメンバー全員が、修士課程で出会った先輩と同様に、他者への愛情に満ちているということです。院生、学部生、卒業生、修了生を問わず、互いに学び合い、支え合うことで、私にとって非常に心地よい学びの空間が形成されています。

多くの人々に支えられ、博士課程1年目を順調にスタートできたことに、心から感謝しています。「難しい」とよく言われますが、私は北欧でよく見られる英語教育の研究者兼実践者を目指しています。原田ゼミや早稲田大学に新しい風を吹き込むことができるよう、愚直に努力を重ねてまいります。

第二言語ライティング研究とわたし

大山 智子

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

2024年4月より佐々木みゆき先生ご指導のもと、第二言語ライティングに関する研究をさせていただいております、博士後期課程1年の大山智子と申します。本研究科の博士後期課程に進学することは長年の夢でありましたが、それが叶い、身の引き締まる思いであります。

修士課程は、本研究科との国際交流もあるイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校にて修了しましたが、留学中、理系大学院生のアカデミックライティング、特に論文執筆における課題に危機感を感じ、第二言語ライティング研究を専門とした研究室を探しておりました。幸いなことに、以前より論文でし

か「お会い」したことが無かった第二言語ライティング研究の第一人者でおられる佐々木先生が本学に着任されたことを機に、進学を決意いたしました。先生の非常に丁寧な研究指導、また私の研究に真正面から向き合ってくださいのお姿から、日々の研究そして教育活動を進める活力をいただいております。

また、尊敬する本研究科のアラムナイ・現在在籍中の先輩方や、学部時代に授業聴講の機会をくださった本研究科の先生方とのご縁は、私にとってかけがえのない資産です。この場をお借りして皆様に感謝申し上げます。

教えを請う

岡野 友美

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

「四十にして惑わず」とは聞くものの、自分の来し方を振り返ると、これまでで12箇所の職場を経験して44歳で子連れ留学、修士を取って45歳で博士後期課程に入学という、幾分変わった学歴と職歴となっている。都度真剣に悩んで一生懸命に取り組んできたつもりではあるが、履歴書を概観すればなんと落ち着きのない人間だ。

しかし、そのような私にも、一貫して情熱を持ち続けていることがある。英語教育だ。目の前の生徒が少しでも英語の学習を楽しんでいると思ってくれたり、英語の力が付くようになってくれたりするならばと考えると、不思議と無限に力が沸く。ただ、問題は、どうしたら楽しいと思ってもらえるか、どうしたらどんな力が付くのがはっきりと分からないことだ。

そして目下、英語教育という学術分野の暖簾をくぐり、知れば知るほどに更に答えが分からなくなってきている。また、「英語教育」と言っても、その中に細分化された専門分野それぞれが魅惑的すぎて、興味関心が広がりすぎて取捨が付かなくなってもいる。不惑どころか、未だに大惑である。

博士課程1年目の今年は何度も研究計画の根本的な練り直しをした。焦燥感の進捗状況だけが更新される中、指導教授の折井先生を始め、研究科の先生方の懐の広さと見識の深さに心底救われていて、感謝の念しかない。きっとこれからも惑いながらの研究生活となるが、皆さまから教えを請いつつ、現場の実践者だからこそ持ち得る困惑感を、逆に大切に真摯に研究に励んでいきたい。

The Reality of Motivating Students from a Teacher's Perspective

木村 恵

早稲田大学大学院教育研究科 博士後期課程

When it comes to motivating students, teachers often hold the ambition that, given the right conditions and strategies, all students can be motivated. However, this goal presents a considerable challenge, as students' motivation is shaped by numerous factors: their backgrounds, family cultures, personalities, and so much more. This complexity raises the question: What can teachers realistically do if it's so difficult to motivate every student? Should they give up or persist, relying on trial and error?

A promising approach centers on fostering motivation through students' self-regulation and learner autonomy. Thorner (2017) observes that, no matter how inventive a teacher's motivational strategies are, their influence on student motivation can only go so far. For a lasting impact, students require a source of motivation that reaches beyond the classroom. Imagine if students had the freedom to choose what they want to learn, determine

their own learning methods, and understand their purpose in learning—this could make motivation less of a challenge, highlighting the importance of self-regulation and autonomy in learning.

But what exactly is autonomy? Ushioda (2014) defines it as having a personal sense of ownership and control over one's learning, along with the ability to make independent choices and decisions. This "capacity" includes not only the freedom to choose but also the metacognitive skills to self-manage one's learning process. Deci and Flaste (1996) previously described this concept as "motivation from within," encompassing both intrinsic and extrinsic elements.

So, in the end, while teachers can inspire and guide, true motivation ultimately comes from the students themselves, as they define the why, what, and how of their learning journey.

Beyond the dim skyline: How Jane Eyre's vision inspired my academic journey

河野 友香

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

[I] looked out afar over sequestered field and hill, and along dim skyline: that then I longed for a power of vision which might overpass that limit; which might reach the busy world, towns, regions full of life I had heard of but never seen: that then I desired more of practical experience than I possessed; more of intercourse with my kind, of acquaintance with variety of character, than was here within my reach.

— Charlotte Brontë, *Jane Eyre*

As an undergraduate literature student reading this passage, I found myself reflecting: “*I, too, want to break free from this stifling life and explore a world I have yet to see.*” Inspired by its call for courage, I began embracing new challenges to shape my own path. Among these were studying abroad in the UK, teaching at a high school, and pursuing a master's degree. To my own surprise, this journey ultimately led me to continue my studies at the doctoral level, becoming the first in my

family to pursue a career in academia.

Then *I desired more of practical experience.* I shifted my major from literature to education in my M.A. to focus my research on English education and psychological factors for young students. I realised that I believe primary education plays a key role in students' learning and well-being, influencing their later lives.

As part of my PhD project, I'm currently developing a new school-based Causality Orientations (motivational patterns) scale. This scale will eventually be used in investigating how students' motivational patterns influence the ways they perceive teachers' motivational practice, and how those ways in turn influence their learning and well-being. Although the scale adaptation is extremely challenging, thanks to the amazing people who keep believing in me, I'm confident that I can produce significant results. It is *here within my reach*, and I'm looking forward to discovering a world that I've yet to see.

研究の原点

藤田 祐美

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

博士後期課程澤木泰代先生ゼミの藤田祐美です。研究の道に進んだ原点を振り返って紹介したいと思います。現在は言語テスト分野の中でも聴解力に興味があり、特に英語で聴いた講義の内容を第二言語学習者がどのように理解しているか、理解できない時には何が妨げとなっているかに興味があります。一方、学部時代はフランス文学科で現代フランス思想、修士ではTESOL（英語教授法）でクラス内の心理的安全性を高める手法など、その時最も心に刺さったことを学んできました。

博士研究の原点につながる原体験は二つあります。一つ目は学習者としての原体験です。日本生まれ・

育ちで、英語教育専攻でもなかったため、言語テスト受験を目標に勉強することが原動力となり、自分の英語力を育ててもらったという思いでした。二つ目は英語教員としての原体験で、高校生のTOEFL指導をする中で、様々な技能を伸ばしていく生徒を見て感動させてもらうと同時に、「生徒の中で何が起きているか」を知りたい気持ちが背中を押してくれたことです。つまり「学習者の能力を育てるテスト」が原点なのだなと思います。ご縁あって澤木先生と巡り合い、学ぶ機会をいただけたことが嬉しく、いつか昔の教え子にも研究結果を紹介することが夢の一つです。

新しい環境の新人として

溝口 龍平

早稲田大学大学院教育学研究科 博士後期課程

2024年度から博士後期課程に在籍しております、溝口龍平と申します。私は澤木泰代先生のもとで、言語評価、特に評価リテラシーに関する研究を行っています。

修士課程から早稲田大学に在籍し、多くの素晴らしい出会いに恵まれ、日々先生方や学友から多くの学びを得ています。このような恵まれた環境で研究に励むことができることを大変幸せに感じています。

私の趣味の一つはラジオを聴くことで、特にお笑い芸人のオードリーさんの番組をよく楽しんでます。ある時、若林正恭さんが「人は常に新しい環境の新人。環境が変わるたびに、新しい『たりなさ』

に向き合わなければならない」と語っていました。学部生の時に英語教育研究に出会って以来、研究のたびに新しい課題や自分にとりない部分を実感し、試行錯誤を重ねる日々の連続です。しかし、その中で少しずつ成長し、可能性を広げていく過程には大きな喜びがあります。

言語評価リテラシーというテーマに取り組む中で、自分自身のたりなさに向き合うことがより深い理解と成果へと繋がると感じています。これからも探究心を持って研究に取り組み、早稲田大学で得た学びや経験を社会に還元できるよう、全力を尽くしていきたいと考えています。

【お知らせ】

NEWSLETTERの発行は本号をもって終了し、今後は会員の近況や新任の教員・助手および博士後期課程入学者のエッセイを、従来とは異なる形式で英語英文学科ホームページに掲載してまいります。

また、英語英文学叢誌第55号への投稿を受け付けております。投稿をご希望の方は、学会ページに掲載されている投稿規定をご確認ください。

早稲田大学教育学部英語英文学科ホームページ

<https://waseda-edu-english.com/>

早稲田大学英語英文学会ページ

<https://waseda-edu-english.com/gakkai/>

事務局住所：

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1

早稲田大学教育学部内

事務局メールアドレス：

eigoebun-joshu@list.waseda.jp

【新著紹介について】

早稲田大学英語英文学会では、会員の皆様による新刊、近刊著書の紹介エッセイとして「私の新著」を学会ページにて掲載予定です。どうぞふるってご応募下さいますよう、お願い申し上げます。

ご応募に際しましては、下記執筆要領をご覧ください。

<執筆要領>

1. 著書のタイトル、出版社、出版年
2. 著書の内容の梗概、あるいは著書にまつわるエッセイ（800字程度）

上記の内容を事務局までメールにてお寄せください。なお、掲載の可否には事務局による選定がございます。あらかじめご了承くださいませよう、よろしくお申し込み申し上げます。